

富山市立図書館

図書館だより

第41号

2010.8

電子書籍とは？

図書館をめぐる新しい動き

電子書籍とは

作家の村上龍が紙の本の出版に先駆け、iPad（アイパッド）向けに電子書籍の配信に乗り出すというニュースが話題になりました。また、シャープが電子書籍事業に本格参入すると発表し、年内には日本でも複数の電子書籍向け端末が出揃うことになりそうです。

最近耳にする機会が増えた「電子書籍」とは、書籍をデジタルデータにして、パソコンや携帯電話、専用の表示装置などにデータを取り込んで（またはWeb上でデータにアクセスして）閲覧する新しい形の書籍です。中には文字や画像以外に、動画や音声を再生できるものもあります。

現在の図書館の資料のほとんどは従来の紙に印刷した書籍ですが、これからの図書館では紙の本や雑誌にかわって電子書籍が中心になるという時代がくるかもしれません。自宅でデータをダウンロードして自由に閲覧することが可能になり、図書館の収蔵スペースの問題や、紙の劣化・汚損・破損・紛失・盗難といった活字資料での保存の問題が、電子書籍が中心になると緩和されるようになります。勿論電子書籍にも固有の課題があります。

電子書籍が閲覧できる端末

<携帯電話>

日本におけるここ数年の電子書籍マーケットの

中心は携帯電話を利用したコンテンツです。マンガや小説が中心で、インターネットに対応した携帯電話向けのサービスが始まった2004年頃から爆発的に広がりました。通学時・通勤時・休み時間などに自由に読めるということで、若い世代を中心に市場が拡大したといわれています。

既存の作品を電子化するだけでなく、ケータイ小説のような書き下ろしの作品が読めることも人気のひとつです。電子書籍でヒットした作品が紙媒体の書籍として出版されるケースもあります。

<Kindle・iPad等の専用端末>

一般的に「電子書籍」という言葉から連想するのは、KindleやiPadのような専用端末ではないでしょうか。

Kindleはアメリカのアマゾンが開発した、電子ペーパーを利用した電子書籍閲覧用の携帯端末で、本や雑誌の他に新聞の購読も可能です。iPadはアップル社が開発した、タッチパネルを利用した多機能情報端末で、電子書籍の他にもゲーム、動画、インターネット閲覧などが楽しめます。



iPad(左)とiPhone(右)

どちらも無線通信を利用し、本や雑誌のデータをダウンロードして読むことができます。

図書館と電子書籍

<国立図書館近代デジタルライブラリー>

国立国会図書館が所蔵する明治期および大正期刊行図書の本文を、デジタル画像で閲覧することができます。著作権保護期間が終了したものと、著作権者の許諾を得たものをデジタル化し、現在、明治期刊行図書約 17 万冊のうちの約 13 万冊と、大正期刊行図書約 9 万冊のうちの約 2 万 7 千冊が閲覧可能です。

■国立国会図書館近代デジタルライブラリー

<http://kindai.ndl.go.jp/index.html>

<青空文庫>

青空文庫はインターネットを利用した無料で公開されている電子図書館です。著作権の切れた作品と、作者から無償で提供された作品を電子テキスト化し、Web 上で誰でも・いつでも・自由に読むことができますようになっています。

1997 年から運営を開始した青空文庫では、ボランティアスタッフの手によって入力・校正が行われ、現在約 9,200 点の作品が公開されています。

■青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp>

<千代田 web 図書館>

東京都千代田区立図書館ではインターネットを利用して、電子書籍を「貸出・返却が可能」なサービスを行っています。千代田区立図書館の利用者に限りですが、インターネットが利用可能なパソコンがあれば、いつでも、どこからでも電子書籍の貸出サービスを受けることができます。

ここで扱っている電子書籍は一冊につき一度に三人まで利用することができます。また、貸出期間の 2 週間が経過すると、自動的にデータが消滅し、返却される仕組みになっています。

ここで利用できる電子書籍のタイトルは、電子書籍専用に製作されたものが多く、W book (ダブルブック) という名称がついています。必要な箇所

ラインマーカーをひいたり、メモ書きや葉をつけることが可能です。また、3D コンテンツのあるタイトルについては、図版などを立体的に閲覧することが可能です。

著作権については、画面上のコピーや印刷を行うことができなくなっているなど、著作権保護の体制を整えています。

■千代田 web 図書館

<http://weblibrary-chiyoda.com>

今後の展望

電子書籍をダウンロードすることが日常風景になるには、まだまだたくさん問題が残っています。たとえば、著作者の著作権と出版社の権利をどのように位置づけ保護してゆくかについてルールが確立されていません。新たに書き下ろされた作品について、著作者が了解すればビジネスとして何の問題もないのですが、すでに活字資料が出版されている場合には、出版社が著作物を複製し頒布する権利（出版権）が電子化を阻むことがあります。現在電子図書館で扱っている資料は、著作権が切れたもの、もしくは著作者からの許諾を得たものに限定されるため、市場に流通している最新の書籍は多くありません。原則として無料で利用できる図書館と、利潤を求める出版社・著作者との間の摩擦を緩和する制度作りが課題となっています。

また、電子データは海賊版が出た場合に取り締まるのが難しいといわれています。たとえば、コミックなどを勝手に翻訳して海賊版をつくり販売するというような行為について、国際的に取り締まることは不可能に近いといわれます。

しかし、電子書籍には検索が容易であったり、スペースがほとんど不要であるなどメリットが多くあります。電子書籍のタイトルや専用端末には、テキストの拡大機能や音声読み上げ機能があるものもあります。そのほか、今までは入手困難だった絶版書籍を電子書籍で読むことができるようになるなど、多様な可能性を持つのが電子書籍です。

(本館 新保)



のんびり湯ったり 「お風呂の本」

富山をもっと身近に感じてもらおうと、東京都内の銭湯の湯船の背景に立山連峰を描き、首都圏に富山をアピールする、「ホットして富山市」PR 事業が今年度から進んでいます。お風呂上りには市の物産品であるラムネを販売するなど、昔ながらの銭湯の良さを生かした PR 方法といえるでしょう。

そこで今回は、郷愁を呼び起こす銭湯をはじめ、お風呂の文化や歴史を知ることができる本やリフレッシュ効果がある温泉の本などを紹介します。



『銭湯』
NHK美の壺制作班／編
日本放送出版協会 2009

高くそびえる煙突や意匠をこらした浴室壁画、下足箱や番台の写真などを豊富に掲載し、昭和の時代を思い起こさせる本です。

関東大震災復興期から昭和にかけ、東京近郊で、贅を尽くした宮作りの外観をもつ銭湯が次々に作られました。人々が、豪華な共同風呂に浸かり、震災や敗戦を乗り越えてきたことがうかがえます。まさしく銭湯は、町が活気づいていく源となっていたのです。

約 3,000 件以上の銭湯を巡った、編者の町田忍氏は、昔ながらの情緒を残す建物やインテリアは文化財だと言います。今までは、生活で使用する施設としてしか捉えていなかった銭湯を、今後は、庶民の文化として、後世に残して欲しいという思いが伝わってきます。



『風呂と日本人』
筒井 功／著
文藝春秋 2008

著者は、日本各地に残る石風呂（サウナのようなもの）の遺構や、全国の「風呂」という地名がついた場所を訪ね歩き、緻密な取材を行いました。それによると、日本の風呂の起源は、朝鮮半島から伝わり、四国・中国地方に残る石風呂だと述べています。

また、江戸の町から始まった銭湯は、最初は蒸し風呂でした。その後、だんだん湯槽に湯を張る、今のような様式になっていったことなど、日本の風呂の移り変わりを知ることができます。

日本人が、世界一の風呂好きになった訳がわかる生活文化史です。



『温泉に入ると病気になる』
松田 忠徳／著
PHP研究所 2010

健康のために免疫力を高めることや、体温を上げることが注目されています。そのもっとも身近な方法が、温泉だと言います。特に、日本の湯治文化は世界にも通用する最先端の予防医学だとも。現在、滞在型の湯治はなかなかできませんが、上手な温泉の活用術を「温泉教授」で知られる第一人者が伝授してくれます。

(八尾図書館ほんの森 小川)

岩倉政治文庫の資料 其の十二

戦後、富山市に居を構えてから歳月を経て、岩倉もいつしか孫をもつ身となりました。老境に入った夫妻にとって孫は、何物にも変えがたいほど、可愛い存在であったことでしょう。昭和 53 年発表の短篇小说「金魚」は、そんな老夫妻の思いを、情感豊かに描き出した作品です。

主人公の庸平・宮子夫妻の元で暮らしていた娘の再婚が決まり、彼女は孫の龍吉を連れて、東京へ転居して行きました。そんなある日、庸平は龍吉が去年見つけてきた金魚「クロ金」が、庭の隅のポリタらいの中で生き延びていたことを発見します。健気に生きる「クロ金」の姿に、龍吉の姿を重ね合わせた庸平は、「クロ金」を池の中で飼うことにします。

しかし翌日、池の中に「クロ金」の姿はありませんでした。池の中の鯉に襲われたのか、それとも川の方へ逃げていったのか？庸平は龍吉のことが気になる、東京へ会いに行くことを決意します。

この小説のモデルとなった、岩倉の孫である梅原龍氏は現在、布絵作家として活躍中です。

また、この作品は昭和 60 年に当時のソビエト連邦で出版された「現代日本短編集」の中に、ロシア語に翻訳して所収されています。（本館 舟山）



『金魚』が所収された単行本『ハトムギの夏』(右)とロシア語に翻訳された『金魚』が所収されている『現代日本短編集』(左)

レファレンスあれこれ

Q. 昭和 10 年前後に永田鉄山という人が殺害された事件の新聞記事が見たい。

A. 昭和 10 年 8 月 12 日、陸軍軍務局長の永田鉄山少将が相沢三郎中佐に殺害されました。相沢事件と呼ばれるもので、翌年の二・二六事件の伏線となりました。

「昭和ニュース事典」第五巻（毎日コミュニケーションズ、1992）には、事件の記事や写真がいくつか掲載されています。また、当館では昭和 10 年の新聞縮刷版は所蔵していませんが、新聞社のデータベースを利用することができます。朝日新聞社「聞蔵Ⅱビジュアル」と、読売新聞社「ヨミダス歴史館」では、明治の創刊時から現在までの新聞記事の検索・閲覧ができます。「ヨミダス歴史館」で、「相沢事件」をキーワードに昭和 10 年 8 月 12 日～13 日の記事を検索すると、18 件がヒットしました。当日の号外、一面で事件を大きく報じた夕刊、翌日の逝去の記事などを、当時の紙面そのままに見ることができます。

あまり大きな出来事でない場合は特に、年月日がわからないと縮刷版から記事を探し出すのは大変です。その点データベースでは、年月日の範囲を広げての検索や、複数のキーワードを組み合わせる検索もできますので、手がかりが少ない場合にも便利です。これらのデータベースは、本館ととやま駅南図書館で利用することができます。（本館 海野）